



ちひろのあかちゃん

●2011年8月3日(水)~10月23日(日)

西洋絵画における聖母子像をはじめ、幼子の姿を描いた作品は数多く存在しますが、いわさきちひろほど、あかちゃんの魅力そのものを画面に定着することに成功した画家はいないかもしれません。

「チューリップのなかのあかちゃん」(図1)や「はだかんぼ」(図4)では、ふっくらとした手足のくびれや、やわらかな髪や透けるような肌の質感が、水彩の微妙なじみと濃淡で描かれています。水彩を駆使した技巧の高さはもちろん、ちひろが母親として子育てをするなかで、肌を通してあかちゃんを知りつくしていたからこそ、生命感にあふれる姿をとることができたのでしょう。「その辺に赤ちゃんなんかいると自分のひざの上に

置いておきたい。親はどうしてもさわらずにはいられないものじゃないかしら。私はさわって育てた。小さい子どもがきゅっとさわるでしょ、(中略)そういう動きは、ただ観察してスケッチだけしていても描けない。」ということばには、母親の画家としての自負がうかがえます。

ちひろは10カ月と1歳の月齢差を描き分けたといい、手や指の表情にも発達段階の微妙なちがいが表現されています。

「アヒルとクマとあかちゃん」(図2)は、手を組んで器用に一本の指をしゃぶり、どこか意志的なものを感じさせます。一方「ピンクのうさぎとあかちゃん」(図5)は、無意識のうちに手の甲を口もとにもっていく仕草から、もっと幼い月齢のあ

かちゃんであることがわかります。

絵本『おふろでちゃぶちゃぶ』では、男の子のぎこちなく服を脱ぐ仕草(図3)や伸びやかで躍動的な姿(図4)に、ちひろならではの描写が生きています。

本展では、水彩によるあかちゃんの代表作、絵本『おふろでちゃぶちゃぶ』の原画や育児書のカット(図6)、幼い頃の息子のスケッチなどを展示します。

(山田実穂)

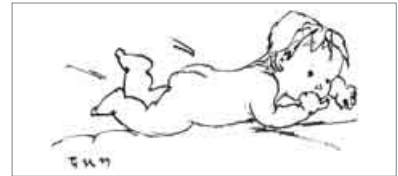


図6 はらばいで動くあかちゃん 1967年

＜企画展＞瀬川康男遺作展—輝くいのち—

●2011年8月3日(水)~10月23日(日)

後援：絵本学会、こどもの本WAVE、(社)全国学校図書館協議会、(社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、中野区、西東京市教育委員会、練馬区教育委員会、武蔵野市教育委員会
協力：グランマ社、童心社、福音館書店、畠山房、ポプラ社、ほるぷ出版

日本を代表する絵本画家・瀬川康男が昨年2月18日、惜しまれつつ77歳で亡くなりました。

瀬川は1932年、愛知県岡崎市に生まれました。幼いころから浦上玉堂や池大雅を好み、第二次世界大戦の終戦を迎えた年、13歳で画家になることを決意して日本画を始めます。高校時代にはドーミエや印象派の画家たちの絵に魅せられて洋画に転向、卒業後東京へ居を移してから、洋の東西を問わず、さまざまな画家の絵画技法を体験しながら吸収し、画風を変化させていきました。

1959年、27歳のときに福音館書店に完全原稿の形で『きつねのよめいり』を持ち込み、その卓越した技術とプロ意識を見込まれて、翌年最初の絵本として出版されます。そして3冊目の絵本『ふしぎなたけのこ』で第1回BIBグランプリを受賞、早くから国内外で注目を集めました。

1960年代、瀬川は、さまざまな画材や技法を絵本にとり入れて次々に画風を変え、見る人を驚かせました。日本一のミリオンセラー絵本になっている『いないいないばあ』(図2)では、アクリル絵の具で地塗りをし、そこにごく薄い和紙(典具帖)を載せた上からガッシュで描き、動物たちの姿に独特のマチエールを与えています。

1970年代前半、古版本の魅力にひき込まれていた瀬川は、江戸初期の丹緑本の

素朴な線や色彩、手刷のぬくもりを現代の絵本で表現しようと多くの絵本を墨版と色版とに分けて描きました。手のひらに載るほどの小本から実寸のものまで、絵と文字を丁寧に書き込んだひな形をつくり始めたのもこの時期です(図3)。

「子どもばなれ」と評されることがあっても意に介さず、自分が本物と納得できる絵本を追求し続けました。多いときには1年に10冊もの本を手がけながら、一方で驚くほど細密に描きこんだリトグラフ(石版)の制作も行われました。

1977年、仕事に追われる日々で疲れた瀬川は、体調を崩し、信州での暮らしを始めます。「いろいろ考えて絵をでっ上げるといのが、何かもう空しくなつてね。それでとにかく、心を無にして、自然の声を聞いてみようと思ひ始めた。」といい、薪割りを楽しみ、近所の子どもたちと遊びながら、野を歩いては草花や虫を丹念にスケッチしました。絵本の出版からいけば空白にあたる4年間は、瀬川にとってその先に求めるテーマを問う、大切な時間であったのでしょう。

1980年代以後、瀬川の絵本は新たな展開を見せます。1981年に発表した『ふたり』(図5)は、初めて画家自身がことばも手がけた絵本です。愉快的追いかけてを繰り返すねことねずみは、細かな模様のリトグラフの版を重ねて描かれています。

1983年には子どもたちとの遊びから想

を得て『ぼうし』を描きます。1987年にこの絵本を単行本として出版したときには、桃太郎や弁慶が登場する元の絵に、狂言回しのような露草やかまきりが配され、帽子の昔話を草や虫たちが静寂のなかで語っているかのような、もうひとつの物語が加えられました(図4)。1986年には8年越しであたためてきた絵本『虫のわらべうた』(図7)が完成します。野の草花、そこに潜む虫たちの輝くような姿が、膨大なデッサンからつかんだ装飾的な線でも描き出されています。

絵本と同時に、タブローの制作も晩年まで続けられました(図8)。観音像や河童、獣、鳥、花——その形は微細な線や点の模様で埋め尽くされています。「河童なら河童、女人像なら女人像、その底に別の形があるの。女人の形だけではない、生命体としての動いてやまぬ原型みたいなものが」と瀬川は語っています。どこまでも深く、いのちの根源にまで迫ろうとする絵への探究心は、生涯変わることはありませんでした。晩年「描きたいものが見えてきて、時間が足りない」と語っていたという瀬川のアトリエには、描きかけの絵が数多く遺されました。

本展では、瀬川康男の代表的な絵本のほか、タブローや版画、手描き本なども展示し、絵に向き合い続けたその画業と人間像を紹介します。

(上島史子)



図1 チューリップのなかのあかちゃん 1971年



図2 アヒルとクマとあかちゃん 1971年

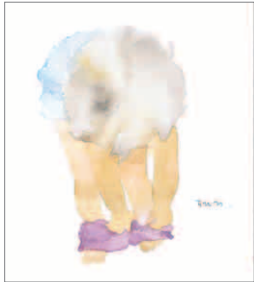


図3 スポンをぬぐ子ども 1970年



図4 はだかんぼ 1970年 『お風呂でちゃぶちゃぶ』(童心社)より



図5 ピンクのうさぎとあかちゃん 1971年



図1 『つきをいる』(福音館書店)より 1962年

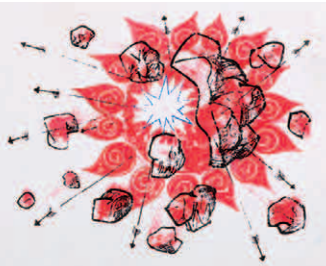


図2 『いないいないばあ』(童心社)より 1967年



図3 『ことばあそびうた』の手書き本 1973年



図4 『ぼうし』(福音館書店)より 1987年



図5 『ふたり』(富山房)より 1981年



図6 『だれかがよんだ』(福音館書店)より 1990年



図7 『虫のわらべうた』(福音館書店)より 1986年



図8 緑色のふくろう 2005年

●瀬川康男展巡回予定
2012年3月1日～5月8日 安曇野ひろ美術館 *展示作品は一部変更されます。

5月7日(土) ピアニカ王子がやってくる! 大友剛が奏でる『窓ぎわのトットちゃん』

“ピアノカ王子”の愛称で親しまれているミュージシャン、大友剛さんが『窓ぎわのトットちゃん』をテーマに音楽とマジックでお伝えする今回のイベントは、東日本大震災の影響で延期となり、急遽、緊急復興支援イベントとして開催しました。4月に被災地を訪れたという大友さん。「石巻の幼稚園、保育園、小学校、児童館、避難所を訪問したのですが、子どもたちの反応がとても良くて、すごく楽しんでくれました。楽しいことに飢えていたんだろうな、と思います。」

作曲家・小森昭宏さんと

『窓ぎわのトットちゃん』は、今まで映像化や演劇化はされていませんが、唯一、“音楽物語”となっています。

「トットちゃんが窓から外をのぞいて待っていたのは、チンドン屋さんです。どなたかに太鼓で、チンドン屋さんをやってもらおうと思います。今日は、とても緊張しています。なぜかという、トットちゃんの音楽をつくった作曲家の小森昭宏さんがいらっしゃるからです。せっかくなので、共演したいと思います。」



ちひろの絵とともに

「僕の母は、ちひろの絵が好きで、家に

はカレンダーや絵本がありました。生活のなかにちひろの絵があったので、“お母さんが描いているのかな?”と思ったくらい身近な存在です。今日は、スクリーンに映したちひろの絵に合わせてピアノを演奏します。」

その他、ユニークな楽器の紹介、マジック、子どもたちによる合奏を交え、あつという間の1時間でした。イベントの収益は、日本赤十字社を通じて、被災地支援と復興支援に使われます。(原島恵)



5月28日(土) 紺野美沙子の朗読座共同イベント 紺野美沙子によるおはなしの会

震災を受け、チャリティイベントとなった今回のおはなしの会。女優の紺野美沙子さんは、ちひろが描いたアンデルセンの紙芝居の朗読とともに、女優、母親、親善大使として考えてきたことを語りました。その一部をご紹介します。

今、自分にできること

母方の祖母が陸前高田の出身で、今も親戚が小友町(ちひろ)に住んでいます。親戚の家は奇跡的に損壊せずに残りました。3月11日以来、自分にできることは何だろうと考えています。私の大好きな朗読の仕事で被害を受けた方の心に寄り添うことならできるかもしれないと考えています。もう少し落ち着いたら、朗読を通して、傷ついた子どもたちの心にも元気を与えてあげられたらいいなと思っています。

震災で家も家財道具も一切なくされた



方は本当にお気の毒だと思います。物がなくなって残るものはなんだろうって考えたとき、自分の心のなかの思い出だと思いました。私は、子どもを育てるなかで、大切にしたいと思っていることがふたつあります。それは、“物よりも思い出”、そして“今しかできないこと”です。早期教育だとか、今はいろんな情報があるけれど、勉強なんて後でしなきゃいけないときが来るのです。それよりも、家

のなかでも外でも五感を目いっぱい働かせて子どもたちと関わって遊ぶことのほうが大事なのではないでしょうか。

本当の豊かさとは

13年前から国連開発計画(UNDP)の親善大使をしています。これまでに10カ国の開発途上国を訪問しました。ある国で、“私たちは経済的に貧しいかもしれない。けれど、心は豊かです。「貧困」という言葉だけで括らないでください。”といわれたことがあります。この2カ月ほど、改めて本当の幸せってなんだろうと考えているのですが、自分たちの文化や伝統のなかで穏やかに自分らしく暮らせることが一番の幸せなのだと思います。今、ひとりひとりが能力を發揮して自分らしく生きることで、良い方向に向かっていくのではないかと思います。(原島恵)

5月18日(水) 「国際博物館の日」記念行事 たてもの探検ツアー

1977年、いわさきちひろの自宅跡地に設立された当館は、2002年に内藤廣氏の設計により、全館バリアフリーにリニューアルされ、2003年には、BCS賞(建築業協会賞)を受賞。建物見学が目的で来館される方も少なくありません。そこで国際博物館の日^{*注1}にあわせ、今年テーマ「博物館・美術館と記憶」にちなんだイベントとして「たてもの探検ツアー」を企画しました。37名の参加者のなかには、明日が予定日という妊婦さんも!

ツアーでは、展示室以外の空間を中心に、参加者をご案内。まず、建物4棟と中庭との配置関係や、建材へのこだわりについて、実物を示しながら解説しました。たとえば、鉄筋鉄骨コンクリートの

建物を軽やかに見せるため、構造体の柱そのものを、壁で隠すことなく見せていること。コンクリート打ち放し壁の型枠に杉板を採用し、木目を映してあたたかな雰囲気を演出していること。床材には、100年以上も前のアメリカのナラ材がリサイクルされていること、等々。その後、随所でちひろにまつわるエピソードを紹介しながら、復元アトリエ→ちひろの庭→生前からあるケヤキ^{*注2}→カフェのエスプレッソ試飲→と進み、締めくくりに裏階段から3階のベランダへ^{*注2}。晴れた日には、遠く富士山を望むことができる絶好の場所です。

内藤氏は、困難な時代にこそ、来館者とともに未来へ向かって希望を紡げる場



参加者1名を特別にアトリエ内にご案内

所に、という思いを込め、リニューアル設計のテーマを「時間と記憶の継承」としました。ちひろの思い出が詰まったこの地でこれまで34年間続いた美術館活動と、大震災を経た今後について考えるとき、建物に込められた願いが一層際立ってくるように感じられます。(中平洋子)

注1: 国際博物館会議(ICOM)が設けた記念日。世界100カ国以上、約30,000の美術館・博物館などが参加し、世界共通のテーマで毎年5月18日にさまざまな企画を行っている。

注2: 通常は非公開のエリア。

ひとこと ふたこと みこと

4月17日(日)

3.11の大震災でお店も自宅も流されてしまいました。子どもたちの住む東京へ来ても、まだ心は落ち着きません。先のことはまったくわかりません。そんななか、美術館へ来て、少し心がやすらぎました。

(気仙沼市新浜町 熊谷賀壽枝)

4月23日(土)

2児の母です。今日は自分の気持ちに自信を持つため来館しました。来て良かったです。我が家のトットくん、皆と同じことができなくて困った子と言われているけれど、キミはキミのままがいい、これがオレだ! って叫んでいるんだね。あなたはいい子です。キミのままがいいんだよ。(お母さんより)

5月13日(金)

わたしは、昨日遠足で来た4年生

です。昨日、とてもおもしろくてまた来ちゃいました。おかあさんと来ました。おかあさんは、はじめて来たのでわたしがせつめいして来ました。おかあさんは大こうふんでした。わたしは、心にきめた1まいがあります。それは、「春の花と子どもたち」です。ほかに、いろいろあったのですが、1まいにきめました。(木島花)

5月27日(金)

1983.10.13に、お母さんはお父さんと自転車でごここに来たそうです。そのときお母さんは今の私と同じ23歳。お母さんは何を考えてたのかなー? 今の私は、心についてよく考えます。心に感じたままに受けとめて生きていくこと。悲しくなったり、苦しくなったりすることも増えたからです。お母さん

は、私の20歳の誕生日にちひろさんの言葉を手紙に書いてくれました。“大人というものはどんなに苦勞が多くても、自分のほうから人を愛していける人間になることなんだと思います。”悲しいときや苦しいときはこの言葉を思い出します。愛をもって生きていきます。

〈展示関連企画「トットちゃんに手紙を書こう!」〉

まどぎわのトットちゃんをみてつぎどうなるのかたのしみでした。まだとちゅうだけど、つづきがたのしみです。きょうは、トットちゃんにあいたくてきました。じぶんのすきなことをしていいんだな、おもうだけでなくてじっさいにやればいいんだなとおもいました。トットちゃんがだいすきです。

(横川綾音 6歳)



美術館 日記

5月3日(火) ☁

お天気にも恵まれたGW。お客様でにぎわうカフェでは「たまねぎシフォン」が好評。会期ごとに変わる野菜メニューが楽しい。6月からは、なんとスイートコーンのシフォンが登場することに。

5月8日(日) ☀

練馬区にも、被災地から133世帯、405名もの方々が、区内の避難所や公営住宅などに避難されていることを知った。美術館も何か力になればと、美術館優待券を発送。区を通して皆さんに手渡して下さることに。今後、隣接する他の区の被災世帯にも配布を広げていく予定。

5月29日(日) ☁/☔

震災後の臨時休館もあり、今月15日までの会期を延長した「窓ぎわのトットちゃん展」。GWだけでな

く、会期が終わりに近づくにつれ、さらに多くの方が足を運んでくださった。「トットちゃんへ手紙を書こう!」企画で図書室に置かれたボックスには、子どもから大人まで、80通を超える手紙が寄せられた。「何度も何度も読み返しています」「トットちゃんは子育てのバイブル」「トモ工学園はもうないけれど、その根にあるものはみんなで育てていけるはず」等々。たくさん、やさしい言葉が寄せられた。

6月5日(日) ☁

「こどもの椅子展」展示室。木の香りとともに、個性豊かな小さな椅子や家具たちが迎えてくれる。“見て触れて座って”楽しむ今回の展示。順番に腰掛けてみては、お気に入りの椅子を探す方、すっかり子ども部屋気分で、座り込む子どもたち。あかちゃんのとくにもら

った「どうぶつすい」のお仲間に出会ったというお子さんも。思い思いに楽しむ姿がほほえましい。来館者からの希望が多く、後日、各作家の了解を得てこの展示に限り、自由に撮影ができることに。

6月10日(金) ☁

ちひろ美術館のもうひとつの魅力、世界の絵本作家コレクションをアピールする楽しいポスター“世界の絵本の原画に出逢える美術館”が出来あがった。さっそく、韓国のピエソグラフ展開催地にも、持っていくことに。

6月13日(月) ☁

ヤマボウシは白い花を咲かせ、緑の葉とのコントラストがあざやか。夏萩も花をつけ、ちひろの庭では、アジサイもやわらかなピンクに色づき始めている。緑のエネルギーが庭からあふれる季節を迎えた。



窓

ちひろ美術館のアイデンティティー

松本由理子(ちひろ美術館 顧問)

美術館のスタッフを対象に、4月から始まった松本猛常任顧問の連続講座。「ちひろ美術館の成り立ち」「絵本の絵とは」「フィンアートとイラストレーション」と回を重ねるなか、「次はちひろ美術館のオリジナルティー、アイデンティティーについて語り合いたい」という職員の発言にハッとする。

36年前に美術館をつくらうとしたとき、生前のちひろと一緒に絵本をつくってきた編集者も、ともに生きてきた岩崎家や松本家の親類縁者も、女学校時代の友人も、戦後の画家仲間も、身近にいて、それぞれの人が、ちひろについて熱く語ってくれた。

ちひろが22年間を暮らした家があり、ちひろが愛した庭がそこにあった。

創設時の美術館のアイデンティティーは、ちひろそのものだった。「ちひろさんは、そういうのは、お好きじゃなかったね」のひとつで、一瞬にしてわかり合えた。

絵本への思いも同じだった。当時は子どもの本のイラストレーターが、タブローの絵描きより、一段も二段も低く見られていた。「(絵本の絵は) 独立したひとつのたいせつな芸術」「(私は) 絵本の絵描き」とのちひろの思いは、美術館づくりに関わる人たち共通のものだった。「残されたモノ(遺

品・作品)」を収蔵・公開する「箱」ではなく、「ちひろの思い」を引き継ぎ、発信、発展させていく「場」をつくらうと。「いわさきちひろ絵本美術館」が誕生したとき、その成り立ちと存在こそ、オリジナルだった。

今、絵本に取り組む美術館はどんどん増え、絵本美術館としての唯一性はない。一方で、安曇野ちひろ美術館の誕生と14年に及ぶ活動は、ちひろ美術館に新しいアイデンティティーを付加している。来年は東京館開館35年、安曇野館開館15年の年だ。ちひろのドキュメンタリー映画も実現する。あらためて、皆でこのことを語り合いたい。

●次回展示予定 10月26日(水)～2012年1月29日(日)

ちひろの白

ちひろの絵に必ずといってよほど使われている色——それは、白。ちひろの白は、さまざまな色彩をひとつにまとめ、輝かせる、要の色です。本展では、ちひろの白の表現の巧みさ、美しさに焦点をあてます。



雪のなかを走る子ども 1970年

<企画展>谷川俊太郎と絵本の仲間たち
～堀内誠一・長新太・和田誠～

詩人・谷川俊太郎は、長年にわたり、絵本や子どもの本の仕事にも精力的に取り組んできました。本展では、谷川自身、「特別な存在」と語る堀内誠一、長新太、和田誠との仕事をとりあげ、詩人の生み出した多彩な絵本の世界を紹介します。



堀内誠一 『マザー・グースのうた 第2集』
(草思社)より 1975年

ちひろ美術館・東京イベント予定

<http://www.chihiro.jp/>

各イベントの予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。TEL.03-3995-0612 E-mail chihiro@gol.com

●「ちひろのあかちゃん」展関連イベント パパ's 絵本ライブ

元祖イクメン、お父さん4人組の読み聞かせユニット「パパ's 絵本プロジェクト」が、読み聞かせ、ライブのほか、お父さんならではの視点で絵本の楽しみ方をご紹介します。



- 日 時：9月3日(土)
午前の部11:00～12:00/午後の部13:00～14:00
- 定 員：各回30名
- 会 場：ちひろ美術館・東京 図書室
- 参加費：無料(入館料別、高校生以下は入館料無料)
- 要申し込み：8月3日(水)受付開始

●夏休み特別イベント ちひろの水彩技法体験ワークショップ

ちひろの絵の特徴でもある、水彩絵の具の“にじみ”技法を体験できるワークショップ。大人も子どもも参加可能です。



- 日 時：8月6日(土)、8月7日(日)
11:00～15:00(最終受付14:30)
- 会 場：ちひろ美術館・東京 2Fエレベーター前
- 参加費：100円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
- 申し込み不要、当日参加受付(混雑時は整理券を配布)

●^{かなともこ}海南友子講演会

「ドキュメンタリー映画監督が見たフクシマ」

昨年全国で公開されたドキュメンタリー映画「ビューティフル アイランズ」の海南友子監督が、事故後の福島原発とその周辺で生活を営む人々を4カ月に渡って密着取材しました。これまでの取材内容を、映像をふんだんに交えて初報告します。



- 日 時：8月27日(土) 17:15～18:45
- 会 場：ちひろ美術館・東京 図書室
- 定 員：60名
- 参加費：500円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
- 要申し込み：7月27日(水)受付開始

<人事>2011年5月1日付で、黒柳徹子が安曇野ちひろ美術館館長に就任しました。

●「瀬川康男遺作展」関連イベント

講演 辻村益朗「瀬川康男を語る」

高校時代からの友人であり、共に本づくりもした装丁家・辻村益朗さんが、瀬川康男の人と仕事について語ります。

- 日 時：9月10日(土) 17:00～18:30
- 定 員：50名
- 会 場：ちひろ美術館・東京 図書室
- 参加費：700円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
- 要申し込み：8月10日(水)受付開始

●新刊紹介

「瀬川康男画集 いきとしいけるもの」

瀬川康男の待望の画集が出版されます。

瀬川康男/絵 講談社/編
体裁：297×225ミリ、128ページ、オールカラー
価格：3200円+税
2011年7月27日刊行予定



●わらべうたあそび

声を出して歌ったり、体を動かしたりしながら、親子で楽しく参加できます。0～2歳までの乳幼児と保護者対象。

- 日 時：8月20日(土) 11:00～11:40
- 会 場：ちひろ美術館・東京 図書室
- 定 員：15組30名 ○講 師：服部雅子
- 参加費：無料(入館料のみ)
- 申し込み：7月20日(水)より受付開始

●松本猛ギャラリートーク

いわさきちひろの息子・松本猛が、母の思い出や作品にまつわるエピソード、展示のみどころなどをお話します。

- 日 時：8月21日(日) 14:00～
- 会 場：展示室内 ※参加自由

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00～
※参加自由

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00～
※参加自由

CONTENTS

<展示紹介> ちひろのあかちゃん/企画展 瀬川康男遺作展—輝くいのち—……②③

<活動報告> 大友剛が奏でる『窓ぎわのトットちゃん』/紺野美沙子によるおはなしの会/たてもの探検ツアー……④
ひとことふたことみこと/美術館日記/窓……⑤

美術館だより No.174 発行2011年7月15日